

〈研究ノート〉

バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏について

土井久美子

はじめに

当館の収蔵品のなかに昭和28年3月28日付で寄贈をうけたウンゲルンコレクションがある。現状では近世絵画284点、陶磁器145点、漆工73点、金工4点、彫刻3点が館蔵品として記帳されている。⁽¹⁾

寄贈者は神戸外国語大学の講師であった白系ロシア人ウンゲルン-シュテルンベルク氏と書き慣わされている。コレクションが当館に収蔵された時期が戦後の混乱期であったためか、その履歴などについての記録が少なく、今まで十分な紹介がされていない。昨年10月25日、ウンゲルン-シュテルンベルク氏【図1】の妹イゾルデ (Isolde) 氏の曾孫にあたるベルリン在住のドイツ人弁護士クリスチャン・フォン・ウイスティングハウゼン (Dr. Christian von Wistinghausen) 氏夫妻にお会いし、ウンゲルン-シュテルンベルク一族とエストニアの関係、また当館への寄贈者バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏の履歴についてウイスティングハウゼン氏の父上の書かれたドイツ語の寄稿文があることをご教示いただいた。ここではその資料と当館の刊行資料などを含めてウンゲルン-シュテルンベルク氏に関する事歴をまとめて紹介したい。



【図1】バルタザール・フォン・ウンゲルン-シュテルンベルク(1950)

資料1 『大阪市立美術館蔵品図録Ⅱ』 大阪市立美術館編 昭和46年3月31日刊

同図録は昭和46年に収蔵品のうち日本書画をまとめて刊行しており、ウンゲルン氏からの寄贈品である肉筆浮世絵 (No99-No104) の図版を掲載、近世絵画 (No201-No478) 276点の目録を記載する。⁽²⁾ その巻末に跋文として以下のような簡略な紹介文が記される。

(前略)「ウンゲルンコレクション」について触れておきたいが、これはその名の示す如く、神戸在住の一外人コレクター Ungern Sternberg の名を冠したものである。同氏は亡命の白系露人と聞くと、晩年を神戸に住んで教鞭を執りながら東洋美術を蒐められた。その集積がこのコレクションで、氏の遺言により、昭和28年当館に寄贈された。東洋、主として日本書画は本図録にみられるとおりで、これに加えて、陶磁、漆工の若干を算える。

資料2 「蔵品紹介-各コレクションの内容と背景」(『大阪市立美術館蔵品選集』昭和61年4月28日)

当館の五十周年を記念に刊行された図録の巻頭に「蔵品紹介-各コレクションの内容と背景」と題する村越英明氏による一文が掲載されている。阿部コレクション、山口コレクション、光琳資料、田万コレクション、カザールコレクションに続いて「その他のコレクション」の中にウンゲルンコレクションについて記される。

次いでウンゲルンコレクションについて言及しておきたいが、これはその名の示す如く、神戸在住の一外人コレクター、Balthasar Ungern-Sternberg 氏 (1879-1952) の名を冠したものである。氏はエストニア生まれの白系ロシア人で、亡命してドイツ国籍を得、戦前来日して大分中学を経て神戸外国語大学でドイツ語を教えた。流浪の果ての日本定住であったが深くわが国の美術を愛し、日本の古い書画、工芸を蒐集した。昭和27年病を得た氏は、こ

れら蒐集品を全部、およそ400点を当館へ寄贈することをきめ、永眠された。うち肉筆浮世絵の小品などに佳品が含まれる。

資料3 「日本美術への愛は尽きず 亡命の一露人教師 死を前に蒐集品を寄付」 (毎日新聞神戸版 昭和27年4月8日)

以上二つの記述はほぼ同じ内容であるが、ウンゲルン氏と直接交流のあった望月信成館長の退任後であり、美術館にはウンゲルン氏について書き留められた資料が殆どなかったのか、⁽³⁾ 前述の記載はこの新聞記事を参照したのではないかと推察する。以下長文であるが全文を引用しておく。

在日二十四年祖国ロシアの赤色革命後パリを経て日本に亡命、大阪外語その他で教鞭をとった親日の白系ロシア人講師が余命いくばくもないと知るや在日中に集めた鉄斎の絵や漆器、陶器など五百点を大阪市立美術館に寄付し中井大阪市長から「近くウンゲルンステルンベルヒ・コレクションとして展覧会を行う計画をしている」とのお礼状を手に、きのう七日朝八時二十五分眠るように七十二歳の生涯を閉じた。この話題の主は神戸外大ロシア科講師バルタザール・ウンゲルン・ステルンベルヒ元男爵(72) -神戸市生田区北野町4丁目165-で、生前から余り身の上話をしなかったが、死後はじめて二つの佳話が明るみに出て今更ながらその死がいたまれている。

去年末病篤しの報にさる五月金田近二外大学長が病床を見舞い、三十一日で満期の外国人講師契約書を更新する署名を求めたところ、「余命いくばくもないことはわかっているのに大学に籍を置いたまま死なしてくれるとはありがたい」と学長と固い握手を交わしたのち、三部屋に余る数千冊の秘蔵の蔵書その他を「神戸市民に長らくお世話になったので、私の蔵書の一切を学校へ寄付したい」と申し出たが、これよりさき去年二十四日ステルンベルヒ元男爵は昭和四年から二年間大阪外語の教壇に立った縁から戦前から愛した日本の美術品をあげて前期のごとく大阪美術館に寄付していることが去年三十一日見舞いの果物籠とともに中井大阪市長の礼状が神戸外大を通じて届けられてはじめて分かったもので、中井市長の礼状には「在日中のご苦心の収集を御寄蔵されて有難い。私は非常に幸せに思う。あなたのコレクションを中心に近く展覧会を行う計画をしています。望月館長に聞けばあなたはご病氣とのこと、早くよくなって下さい」と認めており、これに対し、「全部ならべてはダメ。よいものだけを展覧してください」と口ばさみ、最後まで日本美術への愛情がこめられていたというのが、見舞の果物にもついに手をつけることなく枕辺に飾られたままというのであった。

深いヒサシの帽子をかぶって端麗な容姿で坂を上っているときはさしずめ「復活」のネフリュードフでもぬけ出たように学生間では評判されていたほど帝政時代の男爵で、その几帳面な端嚴な風ぼうに接しられないことが惜しまれているが、一八七九年一月エストニアのリッツルロシア有数の家柄であるウンゲルン・ステルンベルヒ家の次男坊として生まれセント・ペテルスブルグの鉱業大学を終えた後ベルリンの高等工業フライブルヒ大学(化学)ミュンヘン大学(経済)スイスのベルン大学(経済)を遊学し一九一七年(大正六年)の赤色革命とともにパリに亡命、一九二九(昭和四年)から大阪外語、大高の講師、ついで大分高商でも教べんをとり戦後の昭和二十年に神戸外大前身の外専以来ロシア語の講師であったもので長崎高商の講師であった実弟および蒙古にあって赤色政権と闘った実兄も今はなく全く天涯孤独で好きな美術品を集める以外は食事も定量を定時にとるといふ几帳面さでほとんど収集に熱情をこめていた。⁽⁴⁾

遺言によれば遺産のすべては長く身辺の世話を焼いた北村つぎのさん(33)に譲られるもようであるが特に葬式についても遺言状は「一番貧乏な仏式で行い墓は建てなくてよろしい…」と認められており葬儀はきょう八日午後三時から北野町の自宅で浄土宗浄福寺重職が導師となりしめやかに行われる。なおステルンベルヒ元男爵は日本亡命とともにドイツ国籍を取得していた。

大阪市立美術館長望信成氏談 ステルンベルヒ氏の死去の電報をきょう(七日)午後三時ごろ付添の女中さんからもらいました。ウ氏とは戦前から交際していましたが収集品を美術館に寄贈されるとのことで三月二十八日市長代理で三宮のお宅に伺い東洋美術に関する外国の書籍八十冊日本ものの絵画を三百五十点、同陶器百二十点、蒔絵の塗り物など貴重なものを五百数十点もらいました。外国人で日本にこの種の物を一度に多く寄贈されたのは初めてのことでしょう。この品々はウ氏の遺志に従って美術館に出陳して一般の鑑賞に供します。

この記事は本人の没後すぐに掲載された記事で、多くの情報を含んでいる。なかでも本人の経歴部分は後に引用する独文の資料とほぼ一致する。気になる箇所は、展覧会を行う計画をしていますとの大阪市長からの感謝状に対して、「全部ならべてはダメ。よいものだけを展覧してください」と言ったと書かれている点である。ウンゲルン氏寄贈の近世絵画には真筆とは言いがたい作品も含まれており、館藏品図録Ⅱの改訂作業でそれらが目録からはずされている。当館では没後ということで、コレクションの真贋を区別することなくご寄贈を受けためこうした混乱が起こったと推察される。

資料4 村松寛著『美術館散歩』1960年河原書店刊

これは『日本美術工芸』に連載された国内にあった美術館の紹介で、大阪市立美術館について書かれておりそこからウンゲルンコレクションについてを引用する。

ウンゲル・ステンベルグは一八七九年エストニア生まれの白系露人、ドイツ国籍を得て神戸外大で教鞭をとっていたが、昭和二十七年三月二十八日肝臓癌で死んだ。来朝した最初は大分中学の教師だったが、日本美術にほれ込むと共に一生をかけてその収集に打ち込み、独身のままで世を終えた美術マニアである。コレクションはいろいろあるが中心は絵と陶器、はじめ大分の土地柄竹田系の文人画を集めた。竹田のものは鉄斎とともににせ物の多いので有名だが、せっかく奇特のウンゲル氏のもの竹田のはよくない。しかしその弟子筋の作品や肉筆浮世絵には見るべきものがある。(中略)氏が病厚く自らその死期を悟るや、存命中にコレクションを仕分けてそれぞれ配分先を定めた。大阪市立美術館へは手にいれた逸品を持参したりして教を請うこともしばしば、そこで自然懇意となり、望月館長には形見にと自分の使っていたカバンを送ったほどで、大阪市立美術館へ寄贈都決めた三百点はまず最も自信身のあった収集品であったと思われる。(後略)

この村松寛氏の文章からはウンゲルン氏は生前から望月信成氏と懇意であったことが推察される。

資料5 “VON ESTLAND NACH JAPAN Zur 100. Wiederkehr der Geburtstage von Balthasar und Rolf Freiherren von Ungern Sternberg”, “Nachrichtenblatt” No88, Dezember1980.⁽⁵⁾

2014年の10月25日、ウンゲルン-シュテルンベルク氏の妹イゾルデの曾孫にあたるベルリン在住のドイツ人弁護士クリスチャン・フォン・ウイスティングハウゼン夫妻の訪問をうけた。ウイスティングハウゼン氏によると、その父ヘニング・フォン・ウイスティングハウゼン (Henning von Wistinghausen) 氏も1978年に当館を訪れ、秋山進午氏と面会されたという。帰国後ヘニング氏は“Nachrichtenblatt”という雑誌に「エストニアから日本へ バルタザールとロルフ・フライヘル・フォン・ウンゲルン-シュテルンベルク生誕百周年にちなんで」と題する文章を寄稿されていることをご教示くださった。この雑誌はロシア革命後、エストニアを離れ世界に散らばってしまったバルトドイツ人たちの親睦団体が発行しているニューズレターである。当該の文章はそのNo88、1980年12月号に六頁に渡って掲載されている。次にその概要を簡単に紹介する。

ウンゲルン-シュテルンベルク一族はロシア革命時には、エストニアに領地を持つ、バルトドイツといわれるロシアの貴族であり、父はルドルフ・ウンゲルン-シュテルンベルク男爵、母はイザベラといった。バルタザール (バルドゥと呼ばれた) は1879年1月4日バルト海沿いのリーツ (Leetse) にある別荘で、弟ロルフ・フライヘル・ウンゲルン-シュテルンベルクは翌年2月14日タリンで生まれた。妹にWalter von Wistinghausenに嫁いだIsoldeがいる。

バルタザールは1897年タリンにある高校を優秀な成績で卒業したが、その年父が死去している。1900年セント・ペテルスブルグの鉱業大学を終えた後、1901年から1902年にかけてベルリン高等工業、次いで1902年から1903年にかけてフライブルク大学 (化学) で学び、その後1904年から1906年までフランス、イギリス、イタリア、ドイツ、スイス、北アフリカに遊学した。

この頃からバルタザールは美術史に興味を持ち、財産を絵画で運用しはじめた。弟のロルフは外交官となったが、バルタザールは職業につかず、ロシア貿易銀行などを手伝うが1912年にはそれもやめ再びパリ、ロンドン、ミュンヘンに遊んだ。そして1914年から1915年にかけてベルン大学で政治経済学を学んだ。1915年、母が危篤となったため、エスト



【図2】 エストニア、リーツにあった夏の別荘でのウンゲルン-シュテルンベルク男爵一族（1890年）



【図3】 エストニア、リーツの別荘（現在）

ニア経由でロシアに帰るが、ロシア革命が起こる直前、1917年の8月に妹の住むヘルシンキに移った。ロルフは外交官として革命時にはリスボンに着任中であった。

革命のためエストニアに帰ることができなくなったため、兄弟はドイツで合流し、1918年から19年にかけてはミュンヘン、ハイデルベルクと旧知の場所を点々とした。バルタザールは1920年にはベルリンで絵画を売却、また1923年にはパリのルーブル美術館にロココの名匠ワトーの師であったクロード・ジロ（1673-722）の絵画を8万フランで売却した。

バルタザールがかつて購入していた絵画の売却や、翻訳の仕事から収入を得ていたものの兄弟の定収は絶たれていた。そのためロルフの外交官時代の友人のすすめで、二人は外国語教師として日本に赴くことを決める。まずロルフが1926年8月マルセイユを出発し、神戸港から赴任先である高岡高等商業学校（富山県）に、次いでバルタザールも1928年7月26日神戸港に到着する。バルタザールは1929年と1930年大阪外国語学校と、大阪高校でフランス語とドイツ語を教えた。

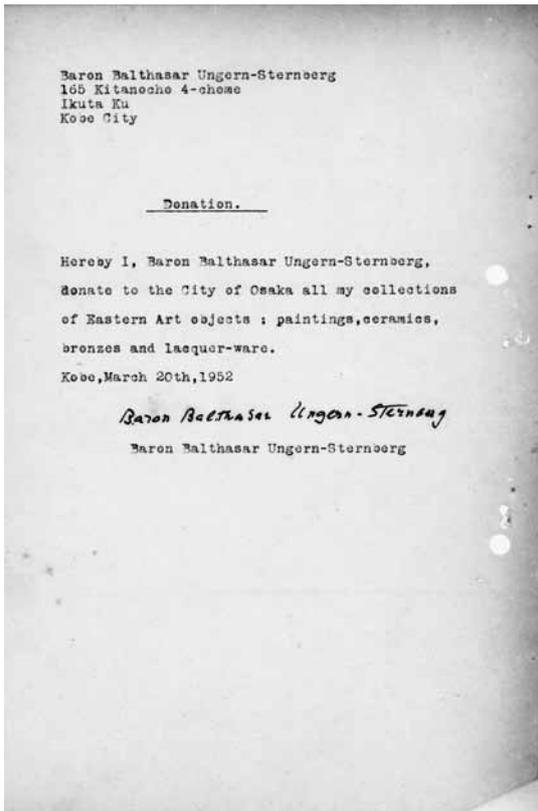
ところが、高岡ではロシア語を話す人もいないため、ロルフは1931年長崎高等商業学校に移る。そして同年、外交官時代の上司であったイスウォルスキーの娘と結婚する。しかし妻とその母は日本の気候が身体ににあわなかったためヨーロッパに戻り、ロルフは結局1933年に離婚している。バ

ルタザールは中国美術に興味を持ち、1931年中国に渡るが、1932年に朝鮮半島経由で帰国する。そして1935年弟のいる九州の大大分に移り、ドイツ語とフランス語の教師として大大分高等商業学校に着任し教鞭をとった。

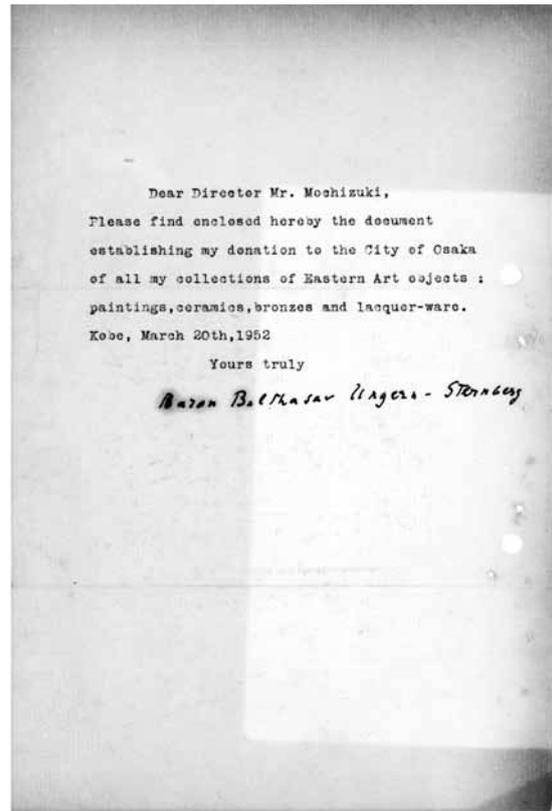
二人はロシア革命後無国籍状態であったため、1941年ドイツ国籍を取得した。ところが1942年ロルフが病気になったため、バルタザールは職を辞し長崎へ移る。しかし翌年ロルフが没したため、1943年3月バルタザールは神戸に移住しそこで終戦を迎える。戦争の混乱と戦後のインフレのため、再び働かざるをえなくなったバルタザールは1946年、神戸市立外国語大学に職を得、亡くなるまで講師としてロシア語を教えた。バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルクは周囲の人に自分のことを多く語らなかったようで、日本における暮らしぶりについては殆どわかっていない。また本人の希望で遺骨は墓地に埋葬せず、一心寺に骨仏として葬られた。

バルタザールは考古学と美術史に興味を持ち、来日後は東アジアの作品を集めた。しかし社交的ではなかったようで、神戸在住のわずかなヨーロッパ人とのみ交流したといわれる。⁽⁶⁾バルタザールは収集した作品を当初、ベルリンの美術館に寄贈する意向であったが、戦後の混乱でかなわず、大阪市立美術館に寄贈することとなった。バルタザールの妹の孫にあたる著者は1978年4月14日大阪市立美術館をおとすれ、438点の作品、（掛軸277点・陶磁器132など）が寄贈されたことを知ったことを記し文章を結んでいる。

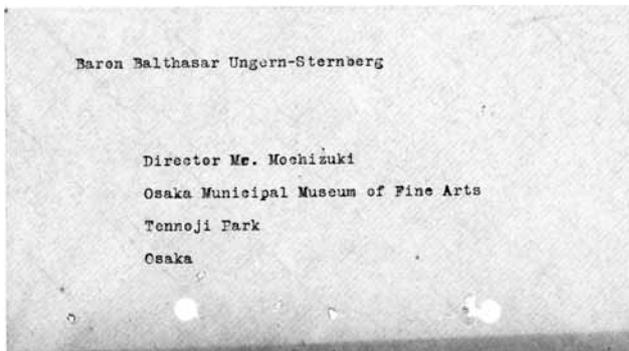
冊子にはバルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏と家族が過ごしたエストニア、パルディスキにあるリーツ（Leetse）の夏の別荘で撮られた1890年の一族の写真【図2】⁽⁷⁾、同じ時に撮られたバルタザールとその兄弟の幼少時



【図4】 コレクション寄贈の意志を伝える書簡



【図5】 望月信成館長宛の書簡



【図6】 望月信成宛の封筒

※図4～図6は寄贈守の書簡、男爵バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルクと署名している。

の写真、1926年にベルリンで撮られた兄弟の写真、1978年当館を訪れ寄贈品の浮世絵を前に歓談するヘニング氏と秋山進午氏の写真が掲載されている。

おわりに

以上、バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏に関する資料のいくつかを記した。伝聞や資料の孫引きは時に事実と異なる場合もある。ウンゲルン氏についても白系ロシア人ではなく、ドイツ系エストニア人、あるいはバルトドイツといわれるドイツ系エストニア人のロシア貴族と呼ぶことがふさわしいことがこれらの記録から明らかになった。ご寄贈の遺志を表された書類には男爵バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルクの署名もある【図4、5】。また氏の遺骨が美術館の横にある一心寺の骨仏として祀られていることも把握していなかった。日本にあるウンゲルンコレクションは当館所蔵品であるが、バルタザールが収集した絵画がルーブル美術館に収蔵されていることもウイステイ

ングハウゼン夫妻のお話と冊子とから知った。ウンゲルンコレクションは浮世絵に優品があるものの、絵画に偽物が多いことのみ強調されてきたが没後一括寄贈のためそのような結果になったと考えられる。寄贈当時必ずしも十分に調査されたとはいえない陶磁器や漆器の再調査もすすみ、作品として登録されずに備品となっていたもののなかにも優品があることがわかった。その作品の一部は2013年に『壺のなかの小さな世界』（大阪市立美術館）に載録されている。ウンゲルン-シュテルンベルクについてさらなる資料が現れることを期して筆をおく。

註

- (1) 寄贈時の書類によると神戸市生田区北野町四丁目一六五、バルタザル・ウンゲルン-シュテルンベルグ氏（昭和二十七年四月七日死亡）からの寄付で、美術工芸品455点、図書145点、昭和28年2月9日付で決裁されている。ウンゲルンコレクションについては没後に譲渡されたため、美術品以外の備品も含まれており書類上の数と実際の数とは必ずしも一致しない。
- (2) 当館の館蔵品はNo1からNo12582までが図録ⅠからⅤに纏められている。Ⅰは昭和45年に絵画（中国書画）編、Ⅱは昭和46年に絵画（日本書画）編、Ⅲは昭和47年に東洋彫刻・工芸編、Ⅳは昭和48年にコプト・エトルスク美術編、Ⅴは昭和49年に考古・その他・補遺編として、館蔵品として登録された順に収録されている。ところがそれ以降はまとまった寄贈や購入による作品のみがコレクション別の図録として刊行されてはいるが、個別の作品について掲載する図録は刊行されていない。このうちウンゲルンコレクションは翌昭和47年に刊行された『大阪市立美術館蔵品図録Ⅲ』には東洋彫刻・工芸品編にも金工No92-No95、陶磁器No157-172、No174-No180、No184-No186、漆工No.201-225が、昭和49年に刊行された『大阪市立美術館蔵品図録Ⅴ』考古・その他・補遺編には陶磁器（No66-No109）が掲載されている。
- (3) 現在では寄贈書類の一部に履歴書がつけられているが、ウンゲルン氏については添付されていない。
- (4) 資料にあげた毎日新聞の記事でロシアの反革命軍を率いたはロマン・ウンゲルンが兄弟であると書かれているが、何らかの誤謬かこちらには記述がない。
- (5) Nachrichtenblatt, DER BALTISCHEN RITTERSCHAFTEN, Herausgegeben vom VERBAND DER BALTISCHEN RITTERSCHAFTEN e. V., Heft 4 - 22. Jahrgang
Nr.88, München, Dezember 1980, Henning von Wistinghausen, VON ESTLAND NACH JAPAN, Zur 100. Wiederkehr der Geburtstage von Balthasar und Rolf Freiherrn von Ungern Sternberg
- (6) ロルフはウンゲルン家の歴史を調べることに関心があったと書かれている。
- (7) 図3はバルタザールが生まれたエストニア・リーツの別荘の現在の姿。長らく一帯はソビエト連邦の海軍基地として使われていたが、エストニア独立後ウイステングハウゼン夫妻が買い取り再び別荘として使われている。



【図7】 立ち美人図 江戸時代・18世紀 (0325)



【図8】 秋野美人図 磯田湖龍齋 江戸時代・18世紀 (0355)



【図9】 粉彩 人物文盒 景德鎮窯 清時代・18世紀 (0703)



【図10】 海亀蒔絵杯 松茂齋 江戸時代・19世紀 (蔵品番号なし)

※図7～図10はウンゲルンコレクション (番号) は蔵品番号